

「イスラエル建国史」

18 米英で発展する シオニズム運動

ユダヤ・中東研究家 滝川 義人

◆第一次世界大戦で同盟国側のトルコと戦っていたイギリスは、パレスチナ攻略で苦戦を強いられていた。そんな折、アメリカが連合国側に立って大戦に参戦してきた。トルコとの戦いを回避したいアメリカは、同盟国側からトルコを引き離す作戦に出た。この意図を察したイギリスはシオニストのワイツマンを代表に立て、アメリカと交渉させてその計画を頓挫させた。このようなイギリスとシオニストの緊密な関係はいかにして築かれたのであろうか。

シオニズム運動の中心母体で、意志決定機関であるシオニスト kongress は、1913年9月ウィーンで開催された第11回大会の後、戦争のため長期間開かれなかった。第12回大会は1921年9月、カールスバード（現カルロビバリ、チェコ）での開催となるが、この8年間に運動は大躍進を遂げていた。

中立を宣言した運動本部

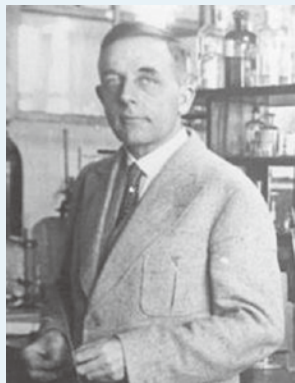
第11回大会の特徴は、ヘルツェルの進めた外交中心の政治シオニズムが後退し、実践シオニズムが主流になったことである。ヘルツェルの政治シオニズムを継承するマックス・ノルダウは、空気を察して出席しなかった。

この時の大会は、アリア（移住）をシオニストの義務と強調し、「一人ひとりがパレスチナへ移住し、そこを終のすみかとして、それぞれの経済生活の基盤を築く」と決議した。

しかし、戦争で決議の実行は不可能になった。そして、ほとんどの人がシオニズム運動の停滞、中断を予想した。移住と開拓事業が停止したのみならず、トルコ政府によってロシアからの移民が追放され、あるいは生活苦から難民化してエジプトへ流れていくなど、表面的にみれば、シオニズム運動は後退していた。

大戦勃発当時、世界シオニスト機構

の本部はベルリンにあった。先代のヴォルフズン会長がドイツ出身であったからである。7月に戦争が始まると、英仏露諸国のシオニスト活動家と連絡がとれなくなった。さらに、第11回大会でシオニスト機構の会長に選出された



オットー・ワーブルク

オットー・ワーブルク（1859～1938年）は、同じドイツ出身であったが（会長就任を固辞していた）、大戦勃発時、運動の中立的立場を宣明したので、ベルリンに本部をおいておく必然性もなくなった。

コペンハーゲン・ビューローの設置

kongress が開かれていない期間中は、シオニスト機構の意思決定機関として、ヘルツェル時代は拡大委員会が置かれていた。その後名称はシオニスト全体会議（ZGC）になったが、これを中立国の都市に置くことになり、ニューヨークやハーグが候補地にあがったが、結局デンマークのコペンハーゲンに決まった。

1914年12月3日、コペンハーゲンでシオニスト全体会議が開催され、コペンハーゲン・ビューローの設置が決まった。しかしこのビューローは、意志決定機関というより、情報の収集と



滝川 義人
Takigawa Yoshito

1937年長崎県生まれ。早稲田大学第一文学部卒業。イスラエル大使館チーフ・インフォメーション・オフィサー（1968～2004）として勤務。現在、MEMRI（メモリ、中東報道研究機関）日本代表。ユダヤ、中東研究者。主要著書：『ユダヤ解説のキーワード』（新潮社）、『ユダヤを知る事典』（東京堂出版）など多数。

伝達を主任務にする連絡事務所で、ロシア出身の数学者レオ・モツキンが所長に選ばれた。モツキンは、バーゼル綱領策定者の一人で、後にkongressの議長（第17回および18回）になった人物である。ワーブルクを初めとするヨーロッパ大陸のシオニスト活動家たちは、戦後和平交渉が始まるまで事態は進展しないと考え、戦時中は中立を守り、嵐の過ぎるのを待つという姿勢であった。



レオ・モツキン

アメリカのシオニズム運動とその発展

しかし、運動は停滞しなかった。アメリカとイギリスで飛躍的に発展するのである。

アメリカのシオニズム運動は、当初ホベベイ・ツィオンの流れをくむ人々の小さい集まりで、アメリカの一般社会のみならずユダヤ人社会にも影響力のない存在であった。

第1回シオニストkongress開催から10カ月後、バーゼルへ行ったアダム・ローゼンベルク（1858～1928年）、改革派ラビとして知られるステファン・サムエル・ワイズ（1874～1949年）らが中心になって、1898年



ステファン・サムエル・ワイズ

7月4日にニューヨークで会合を開き、アメリカ・シオニスト連盟（AZL、後にアメリカ・シオニスト機構 ZOAと改称）を発足させた。さまざまな組織36団体の寄り合い所帯で、メンバー数約5,000人であった。

アメリカでは、シオニズム運動に対する風当たりが強かった。その急先鋒が、ユダヤ教改革派で、同化によるユダヤ人問題の解決をはかるべしとする立場で、シオニズムを攻撃した。ヘブラー・ユニオンカレッジがその牙城（がじょう）であった。ワイズは例外的な人であった。

ロシア・東欧からの移民の多くは、低賃金労働者であり、思想的には社会主義の傾向が強かった。彼らはシオニズムを退行、反動と考え、シオニストを二重忠誠者と非難した。運動はアメリカの一般社会は言うに及ばず、ユダヤ人社会にも影響力のない存在であった。

暫定執行委員会の発足と ブランダイスの登場

そのアメリカで、シオニズム運動が大飛躍を遂げる。きっかけは大戦勃発。そして、有能な活動家が登場して、指導力を発揮した結果である。1914年時点でメンバー数1万2,000人であった運動は、戦争終結後の1919年時点で17万6,000人に達していた。わずか5年間で16万人以上も増えたのである。年間予算も1万5,000ドルから5年後には300万ドルの規模に急増した。予算増は、活動の幅と厚みが大きくなったことを意味する。



ルイス・D・ブランダイス

1914年8月30日、ニューヨークでシオニスト諸派すべてを集めて、緊急集会が開催された。呼びかけた人の一人が、ベルリンから来たシオニスト執行部のシュマリヤ・レビン（1867～1935年）で、大戦勃発でベルリンに戻れなくなり、ニューヨークに滞在中であった。

この緊急集会は、シオニスト全体会

議暫定執行委員会をたちあげ、委員長にルイス・デンケビッチ・ブランダイス（1856-1941）を選出した。名称から判断できるように、この委員会は、意志決定を行い、さらにその決定を執行できる暫定組織であった。ヨーロッパ大陸のコペンハーゲン・ビューローとは全く違う。この暫定執行委員会は、大戦の結末が明らかとなる1918年6月に解散したが、この委員会を主導したのが、弁護士のブランダイスであった。後年、本人の遺徳をしのんでブランダイス大学が設立される。



ブランダイス大学

イギリスで転機を迎える シオニズム運動

シオニズム運動はイギリスでも飛躍的な発展をとげた。`労務者、大隊の編成に失望したヤボチンスキーは、エジプトを出た後、ローマ、パリ、ロンドンでユダヤ人部隊（Jewish Legion、ユダヤ軍団）の構想を説いてまわった。しかし真面目に話を聴く人は一人もいなかった。特にロンドンでは陸軍省でけんもほろろの扱いを受けた。

イギリスのシオニストたちや社会的な地位のある人々は、パレスチナのユダヤ人社会がトルコ政府から報復されると主張し、編成に強く反対した。シオニスト活動家で賛成したのは、当時イギリスで活動中のハイム・ワイツマンなど数名にすぎない。やがて二人は肝胆相照らす仲になる。

ヨーロッパの東部戦線では、連合国側のロシア軍が苦戦し、おびたしい損害をこうむっていた。そのロシアから逃げてきたユダヤ人の多くは、ロンドンのイーストエンドに住んでいた。下層社会の彼らも、ヤボチンスキーの呼びかけに無関心であるどころか、敵意さえ示した。

1915年5月初旬、シオン驃馬隊（らば隊）がガリポリで苦闘している頃、ヤボチンスキーはストックホルムへ妻アニヤに会いに行った。その際コペンハーゲンに足をのぼしている。コペンハーゲン・ビューローから話を聞きたいという誘いをうけたのである。彼はシオニスト機構の役員ではない。6月の定例会議には出席できないが、幹部と意見を交換したいという話であった。コペンハーゲン・ビューローは、ヤボチンスキーのユダヤ人部隊の編成構想を知っており、これを阻止するために本人を呼んだのである。ヤボチンスキーは説得に応じず、激しい論争の末話し合いは物別れに終わった。

歩兵中隊に配属された 元シオン驃馬隊々員 一軍団編成に新しい動き

1916年末、シオン驃馬隊の元隊員120名がロンドンへ来た。イギリス軍に志願するのが目的であった。彼らは採用され、ロンドン連隊第20大隊所属の中隊として編成された。ヤボチンスキーは一兵卒として入隊した。イギリスは、外国籍のユダヤ人を英軍に採用し、れっきとした部隊に入隊させたのみならず、全員を同じ中隊に編入したのである。それは、パターソン中佐の尽力のおかげであった。中佐は健康が回復してロンドンに戻っていた。そしてそのパターソンは、レオポルド・アメリーという人物を紹介した。当時戦時内閣の次官補、後にバルフォア宣言の原文を作成した人物である。

ワイツマンが政界に、ヤボチンスキーが軍に働きかけ、それぞれイギリスの友人に支援されて運動を展開し、やがてその努力が結実する。